

クリスマスの 12 日間～クリスマスから公現祭まで～

ヨハネ「1:32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。」

マタイ「2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」」

皆さんおはようございます。そしてメリークリスマス。そうですよ、「メリークリスマス」と言いました。クリスマスは昨日だったので、もうお祝い気分は終わりと考えている方もいるでしょうか。伝統的な教会の暦を見るとそうでもありません。伝統的な教会暦によれば、今日（クリスマスの翌日）は、「クリスマスの初日」で、クリスマスの日から公現祭と呼ばれる 1 月 6 日の祭日までの 12 日間の最初の日です。クリスマスは知っていると思いますが、何人の方が公現祭をご存知かお聞きしてみたいと思います。公現祭について聞いたことがある、何を祝うものか知っているという方は手を挙げてください。（恥ずかしがらないでくださいね。公現祭のことを聞いたことがある方は挙手してください。）

公現祭について知らなかったとしても責めたりはしませんよ。私自身も成人してからでもだいぶ後の方で公現祭が何かを知りましたから。プロテスタント福音派の運動の中では、伝統的な教会暦を含め、こういった古い伝統にはそこまで注意を払いません。私たちは救いの歴史でも決定的に重要な出来事、イースターとクリスマスとを祝います。一方はキリストの死と復活、一方はキリストの誕生です。OIC のような福音派の教会の中には、ベツレヘムでのキリストの誕生を待ち望む待降節を祝う教会もあります。けれどもだいたいのところ、福音派は伝統的な暦の中で特別な日とされる日にはそんなに注目しません。皆さんの多くは私が教会の歴史が大好きなのをご存知でしょう。今日は、教会の歴史から私が学んできたことをお分かちしたいと思います。

今日の説教は「クリスマスの 12 日間～クリスマスから公現祭まで」というタイトルにしました。今日焦点を当てるのは公現祭ですが、その前に待降節のことを少しお話したいと思います。

従来考えられている通り、待降節は救い主が来られるのを待ち望む期間です。そして待降節の期間に行うことは伝統的には買い物や祝い事、贈り物をするものではありません。そうではなくじっと待つのです。待降節は、救い主が来られることに向けて自分自身を整える期間です。そしてベツレヘムでの救い主の誕生だけではなく、キリストが戻って来られ、御国を建て、裁きをもたらされる再臨の時をも覚えるのです。アリストテア牧師もこのことに先遇触れました。待降節の時期、私たちはキリストの誕生を楽しみにし、同時にイエスの再臨に備えておくように自分自身に改めて思い起こさせるのです。

そしてクリスマスが来たら、伝統的にはそれが祝い事の始まりです。そこから「クリスマスの12日間」が始まります。「クリスマスの12日間」という有名なクリスマスソングをご存知のことでしょう。この歌は、クリスマスの後から公現祭までの日の贈り物についての歌です。私が子どもの時、私の家族も行ってた教会でもクリスマス前を祝い、クリスマスから公現祭までの日に関しての認識がなかったので、この歌で私はむしろ混乱していました。今日は、過去にこの公現祭の時期が祝われてきたことから生まれた財産のいくつかをお分かりしましょう。この時期を祝うという古いやり方に戻ろうと唱えたいのではありませんが、歴史から少しお分かちしたいと思います。

この後5分くらいで、伝統的な教会暦がどのようにしてできたのか少しお話します。もちろん、暦自体は人が作ったもので、聖書で命令されたものではありません。これらの伝統的祭日のどれも、毎年祝わなければならないというわけではありません。けれども、教会暦にある祭日は、実際に2000年前に空間的・時間的に起こった重要な出来事を祝うために設計されています。ですから、そういう意味ではこういった記念を覚えることは価値のあることです。伝統的な教会暦となったものの起源：これはクリスチャンとしての財産の一部ですから、今日は皆さんと少しお分かちしたいと思います。そしてその物語は、人類の歴史の中で最も重要な出来事、キリストの復活から始まります。

これについては皆さんもよく覚えておられますね。福音の記録によると安息日の後、週のはじめの日の朝、女たちがイエスの墓に行ってみるとそこは空っぽでした。御使いが、イエスは死からよみがえられたのだと彼女らに伝えました。一世紀から、クリスチャンの慣習において週の初めの日は「主の日（主日）」として知られ、毎週キリストの復活を祝う時です。「主の日」は特にヨハネの黙示録1:10で触れられています。また使徒言行録20:7とコリント第一16:2で週の初めの日にクリスチャンが集っているのがわかります。この日が安息日の翌日（7日目）で、復活の日は時に「第八の日」とも呼ばれることが、クリスチャンにとって意義深い部分です。新しい創造の週の第一日目のようにも捕らえられます。それは、新しい人類の歴史の正式な始まりだからです。

クリスチャンの歴史でも早い段階で（少なくとも2世紀までには）、クリスチャンは過越祭の時期あたりで復活を毎年祝っていました。最初はクリスチャンたちの間でもどの日にイースターを祝うかについて慣習の違いがありました。最終的に、教会はイースターを3月21日以降、最初の満月の後の日曜日と決めました。それが、3月後半から4月後半までの日曜日にあたって、毎年イースターの日がちが異なる理由です。

イースターの次の大きな祭日はペンテコステ（五旬節）です。もともとはレビ記23:16に命じられている収穫から穀物の捧げものを主に捧げる、ユダヤ人の祭日「初穂の日」として知られていました。ペンテコステは過越の50日後で、その日は使徒言行録2章で聖霊が弟子たちに降臨した時でしたから、クリスチャンにとって重要です。これが教会の誕生日と考えられています。一世紀から、クリスチャンはいつもペンテコステの日曜日を祝っていました。初代クリスチャンの時代、次にいつも祝われていたのが公現祭でした。祝われ始めたのは二世紀後半のようです。公現祭とは区別されるクリスマスと呼ばれる日ができる前に公現祭が存在したのです（別々で祝うようになったのは四世紀頃です）。

ここでやっと今日焦点をあてるどころまでできました。公現祭には、イースターやペンテコステのように、ユダヤ人の中で祝われていた祭りとの関連はありません。公現祭の日付が

選ばれた主な理由は12月21日の冬至の後に日が長くなり始めるからのようです。イエスは「世の光」ですから、クリスチャンが、イエスが世に来られたことを祝うのにちょうどよい時と決めたのです。

公現 (Epiphany) という言葉は、「表明」「出現する」「明らかになる」という意味があります。「表明」「出現する」「明らかになる」。関連するギリシャ語は「Theophany (神現)」で、文字通り「礼拝する者に対しての神の表明」という意味です。この日は、御子イエス・キリストを通して神が世に現された様々な方法を祝う日です。

神の子なるイエス・キリストが世に現わされた例を聖書からいくつか挙げられますか？今、聖書の学びの小グループで教えている場面であれば、私だったら参加者にいくつか例をあげてもらい、ホワイトボードに書き込んだことでしょうか。でも今日はそういう状況ではありませんから、この礼拝堂ではできません。ですから私自身でいくつか例を挙げますが、私がお聞きする質問にどう答えるかご自身でも考えてみてください。おもにお聞きしたいのは「聖書の記録を見てみると、神の御子イエス・キリストは、どのようにして世に示された/現わされたのでしょうか？」です。

イエスが世に現わされた方法の一つとしては、イエスのしるしを通して、神の力を現わすことによって、というのが挙げられます。

もう一つの例は、ヨルダン川でのイエスのバプテスマの直後に聖霊が下った様子でしょう。マルコ 1:9-11 「1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来られ、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。1:10 そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上に下られるのを、ご覧になった。1:11 そして天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」」

ここで聖霊が鳩のような形をとって天からくだり、イエスに留まったことがわかります。そして天から「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」と声がしたので、これは公現の最高の例の一つと言えます。東方正教会の用語では、この出来事は神の人間に対する具体的な現れ、「神現 (神の顕現)」と呼ばれています。実際に、この場面で三位一体のすべての位格が現れているのにお気づきになりましたか？父、子、聖霊です。

その他にもイエスが世に現わされた場面を挙げられますか？例えば、カナにおける結婚式で水をワインに変えた、イエスの最初のしるしはどうでしょうか？

ヨハネ 2:11 「2:11 イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」

「現わされた」と訳されている部分のギリシャ語は、「ephanerosen」で、「epiphany (公現)」と関係しています。またここで「弟子たちはイエスを信じた。」とあることに気づいてください。弟子たちは自分たちの目でイエスの力、イエスの栄光の現われを目にしたのです。ですから彼らはイエスに信頼し従うことができたのです。

神の御子イエスのその他の現われは何でしょうか？ご自身の誕生、人の形をとってこの世に入られたことはどうでしょうか？神が人となられたのです。

ヨハネ 1:1-2 「1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。1:2 この方は、初めに神とともにおられた。」

ヨハネ 1:14 「1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」

「ことば」というのは、神の御子、三位一体の第二位格を意味しています。ことばは...人となって、そしてことばは私たちの間に住まれた。神ご自身が人となり、人類の間に住まわれたのです。後でもう少しこのことに触れます。

神の御子、イエスが世に現わされた例をいくつかご紹介しました。古代教会で公現祭が最初に祝われていた頃は、次の3つの出来事を併せて祝っていました。キリストの誕生、キリストのバプテスマ、そしてガリラヤのカナでの最初のしるしです。そういう意味では、公現祭はクリスマスが四世紀に公現祭と別々にされ、12月25日に祝われるようになる前の最初のクリスマスと言えます。

数分前に、公現の例をいくつか挙げてくださいましたが、皆さんの中にマタイ 17章での変容を思い浮かべた方はいたでしょうか。それはイエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネを山へと連れて行き、彼らの目の前で姿を変えられた時のことです。彼らは天が「「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい」」と言うのを耳にしました。(マタイ 17:5) この出来事も公現の一つと呼ぶのが妥当でしょう。けれども聞いていた人たちは少数で、内輪で起こったことでした。これは1月6日の公現祭で祝う部分ではありません。けれどもより伝統的なスタイルの教会では、公現祭から灰の水曜日までは公現の時節として知られ、その最後の日曜日の公式聖書朗読ではこの変容の箇所が読まれます。

もう一つ例を挙げてみましょう。東の方で博士に現された星を思い浮かべた方はいますか？博士たちによる、こどもだったイエスの訪問は、最初は公現祭の祝い事に含まれていませんでしたが後に含まれました。実は、現在の西方教会では、公現祭の祝い事のメインは博士の訪問です。一方で東方教会が焦点を当てるのはイエスのバプテスマです。カナでのしるしは、今は公現祭ではなく公現祭の時節の第二の日曜に祝われています。今日のメッセージの残りの部分では、三大公現ともいえる「キリストの誕生」「博士の訪問」「キリストのバプテスマ」に焦点を当てたいと思います。

A. キリストの誕生—神の御子の受肉

先ほど、人類の歴史の中心的ポイントはキリストの死と復活であるとお話しました。イエスの死が私たちの罪の罰を支払い、イエスの復活は、イエスが罪と死に打ち勝ったことを証明しています。ですからイエスに信仰を置いた者は罪の赦しと永遠のいのちを得ることに確信を持つのです。私にとってイースターは最高に素晴らしい知らせであり、祝うべき最高に素晴らしい出来事で、毎年のお祝いを楽しんできました。一方で、私にとってクリスマスはそこまで興味深いものではありません。赤ちゃんの誕生は喜ばしい出来事ですが、クリスマスが受ける注目は、より重要な出来事であるイースターを目立たなくさせるように思えるのです。

けれども、最近では私の態度も変わりつつあります。もしもクリスマスがなかったら、イースターもなかったのです。けれども、それだけではありません。救い主はその人生を生きて、私たちの贖いを十字架で成し遂げるためにお生まれになる必要があったのです。そうです、イエスの誕生が、来たるメシヤの預言を成就しました。けれども、ここ数年私の注目を捕らえているのは、この誕生が神の子の受肉であり、三位一体の第二位格が人となったということです。神は別の方法で受肉することもできたと思います。成長した体を作り上げて、そこに住まうなどです。しかしそうしたとすれば、イエスは人間と一体となることができず、私たちが経験するすべてを経験することができなかつたことなのでしょう。しかし、お生まれになり、子ども時代を経験し、成長し、空腹、疲労、誘惑など私たちが経験する問題を経験することで、イエスは完全に私たち人間の状況と一体となることができたのです。

ヘブル 2:14 「2:14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、」

ヘブル 2:17-18 「2:17 そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。2:18 主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。」

ヘブル 4:14-15 「4:14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」

イエスは完全に私たちと一体となられ、イエスは誘惑に打ち勝たれたので、私たちが直面する誘惑について助けることができます。私にとってこれが慰め、そして励ましです。神である御子が私たちの直面するすべてを経験され、それでもイエスは誘惑に打ち勝たれたのです。イエスは私たちが罪に陥るのを防ぐべく助けてくださいます。

ここで私たちが話しているのは、三位一体の第二位格についてです。彼は人となるため地におりて来られたのです。多くの人が、イエスが完全に神であり完全に人であるという考えに苦しみます。そういった人たちは、イエスが神よりも知識や力が少ないと言っているように見える聖句を見て、イエスは神よりも劣るに違いないと考えます。例えばマルコ 13:32 「13:32 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」イエスが完全に神であることを否定したい人たちはこういう聖句を指摘し、イエスが知識において限界を持っていたのだから神であるはずがないと言います。しかし私はこういった個々の聖句は気になりません。私のお気に入りの聖句に注目してもらいたいと思います。

ピリピ 2:5-8 「2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

私はここでの描写が好きです。三位一体の第二位格である方が自分を無にして、神のあり方を捨て、人の姿をとり、人となって自分を卑しくし、最も屈辱的な死を苦しまれたのです。彼がそうされたのは墮落した人類を贖うためでした。

4世紀に、キリストの完全なる神性の観念に対してアリウスという説教者が異議を唱えました。有名なニカイア公会議はこの問題について議論するために招集され、その公会議の英雄でもあり、三位一体の神学の英雄だったのはアタナシオスという人で、聖アタナシオスとも呼ばれます。公会議は、キリストは「よろず世の先に、父より生まれたるひとりの御子」であり、「永遠に御父と共存」し、「父と一体なり」と結論付けました。イエス・キリストが完全に神であり完全に人であるという議論の中で、アタナシオスは次の宣言をしました「引き受けられていないものは贖われてはいない」これは、神である御子は人間を贖うために人の姿をとる必要があったということです。これは極端なほどに重要な断言です。人間を救うためには、神ご自身が人間の姿をとらなければならなかったのです。アタナシオス著書の中でも最も重要なものは「On the Incarnation of the Word (仮題：ことばの受肉において)」という本です。

2000年前、ベツレヘムの家畜小屋で神のことばが人となり、この世にお生まれになりました。受肉の教理はキリスト教にとって重要です。

では次です。

B. 賢者 (博士) の訪問

マタイ 2:1-2 「2:1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」」

こうして目を見張る物語が始まります。ここで「賢者」と呼ばれる人たちが、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」について東方から尋ねにやってきたのです。英語のNASB訳聖書の注釈には、この「賢者」につて「天文学、占星術、自然科学を専門にした教養のある階級の男性」と呼んでいます。賢者についてはダニエル書にも数回触れられています。例えばダニエル 1:19-20 には、ダニエルと3人の同胞についてこう書いてあります。

「1:19 王が彼らと話してみると、みなのうちでだれもダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤに並ぶ者はなかった。そこで彼らは王に仕えることになった。1:20 王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。」この「呪法師 (magician)」という言葉が、英語の聖書では5回か6回出て来て、40年前に、私は鉛筆を手に、その言葉が出てくる度に後ろ半分を消して m-a-g-i (magi:賢者)という言葉が残るようにしました。「呪法師」「呪文

師」という人たちは、マタイ 2 章に触れられている賢者の先駆けのようなものです。神がこういった異邦人占星術者を用いてユダヤ人の王（来たるメシヤを意味した称号としてユダヤ人に用いられた）の誕生を示されたことは私にとって驚くべきことです。実際、何年も前に旧約聖書を全部読んだ時に、私は神が何度も異邦人のことを気にかけられる場面を見つけて驚いたものです。通常私たちは旧約聖書が選ばれし民のイスラエルの物語であると考えます。けれども、神がご自身の心遣いを異邦人にお見せになるところがいくつもあるのです。ですから私は数年前に「神は異邦人を愛される」というテーマで説教をしたいと決めたほどです。このテーマに沿って私が旧約聖書で見つけた驚くべき聖句の数々を皆さんにお分かちできるからです。そしてもちろん、新約聖書でもこの賢者の物語から、ユダヤ人のメシヤがどうやって異邦人にも神の御国に加わる道を開かれたのかが分かります。

例えばエペソ 2:11-14 「2:11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、2:12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。2:13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、」

数週間前にアドベントキャンドルの点火でこの聖句が読まれました。今や異邦人が神の御国に加わる機会を与えられたことは素晴らしいことです。またマタイ 28 章の大宣教命令で、イエスは「あらゆる国の人々を弟子としなさい」と弟子たちに教えられました。あらゆる国の人々が今や神との関係に入ることを歓迎されているのです。

今日の説教のテーマは公現、イエス・キリストを通して神が現わされることです。そしてユダヤ人の王の誕生を神が賢者に示された様子をここで見ることができます。

では次に移りましょう。

C. イエス・キリストのバプテスマ

ルカ 3:1-4 「3:1 皇帝テベリオスの治世の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国主、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主、ルサニヤがアビレネの国主であり、3:2 アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った。3:3 そこでヨハネは、ヨルダン川のほとりのすべての地方に行って、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説いた。3:4 そのことは預言者イザヤのことばの書に書いてあるとおりである。「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』」

まず、この福音書の著者ルカが彼の話をも、皇帝テベリオスの治世で、ポンテオ・ピラトが総督だった時に時空で起こったこととして据えていることに注目してください。この出来事は空間的・時間的に起こったのです。そしてヨハネのメッセージは、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ（洗礼）でした。これは私たちすべてにとってのメッセージです：悔い改め、罪に背を向け、洗礼を受ける

マタイ 3:13-17 「3:13 さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに来られた。3:14 しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして、言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか。」3:15 ところが、イエスは答えて言われた。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」そこで、ヨハネは承知した。3:16 こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。3:17 また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」」

イエスが洗礼者ヨハネのもとへ行ったのは、イエスが悔い改めを必要としていたからではありません（ヨハネもその必要がないとわかっていました）。明らかに、イエスは私たちの模範となるためにそうなされたのです。もしくはそれ以上のためかもしれません。

洗礼者ヨハネの証を聞いて見ましょう。

ヨハネ 1:29 「1:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

ヨハネ 1:32-34 「1:32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。1:33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』1:34 私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」

これこそが公現であり、神現であり、イエス・キリストを通した神の現れです。聖霊がイエスの上にくんだり、その後の3年間の働きでイエスを導きました。そしてイエスはヨハネ14章で弟子たちに「もう一人の慰め主」をお与えになると約束します—聖霊です。そして使徒言行録2章で、屋上に集っていた弟子たちの上に聖霊がくだり、世を変える働きのために彼らを強めました。

罪の赦しのための悔い改めの洗礼を説いた洗礼者ヨハネのメッセージに戻りましょう。ヨハネはマタイ3:2でこう言いました。

「3:2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」」

天の御国には近づいています。これが今私たちの説くメッセージです。メシヤが来られ、神の御国は近づいた。罪を悔い改めて赦しを得よ。皆さんの中でこのステップを踏んだことのない方は、今日すればよいのです。礼拝堂の後ろで、「Lift」という看板が立ててあります。必要のある方はどなたでも礼拝後にそこへ行ってください。担当者がそこに居てあなたの必要についてあなたと話し祈ってくれます。今日、イエスのもとへ来ましょう。神の祝福がありますように。